

抄録

第9回日本シニア小児科医連盟

講演 1

「日本の新生児医療が目指す道～仁志田博司先生を偲んで」

中村友彦（長野県立こども病院院長）

私は 1984 年の卒業で、その年に東京女子医大に母子総合医療センターが開設されました。当時の学会では女子医大の超低出生体重児（超未熟児と呼ばれていました）の管理・成績発表のある会場は溢れるばかりの人で、特に仁志田博司先生の人間味溢れるコメントに興奮と羨望を感じました。女子医大の超低出生体重児管理法が全国に普及して、日本の新生児死亡率は世界で最も低くなりました。長野県立こども病院は 1993 年の開院で、後に埼玉医科大学総合医療センターの教授になられた田村正徳先生に率いられて新生児科はスタートしました。現在は、特に妊娠 22～23 週の超早産児の予後が世界的にも優れており、その管理法について世界各地から医師と看護師の研修希望があります。

短期予後が頂点に達した日本の新生児医療の次の課題は長期予後の改善です。その Key word は「Family Centered Care : FCC」だと思います。私達は Finland の Turku 大学が開発した FCC のための「Close Collaboration with Parents Training Program」の普及を計画しています。FCC は新生児医療だけでなく小児医療全体のテーマだと思います。病気が治癒して退院しても家族に受け入れられなければ「こどもの心と体」は癒やされません。

私達は、冬の信州白馬・大町で医師・看護師・企業関係者約 1,000 名が参加する「新生児呼吸療法モニタリングフォーラム」を 20 年以上開催してきました。その懇親会の最後は仁志田博司先生の三本締めが恒例で、先生曰く「三本締めは三つの願い」を込めて締めるのだそうです。先生の三本目はいつも「今年世界で生まれてくる赤ちゃんとその家族の幸せ」を祈って締められました。これからの日本の新生児医療は、仁志田博司先生の思いを引き継ぎ「世界の赤ちゃんとその家族の幸せ」を願い世界をリードしていくと思います。

講演 2

「子どもの発達を多領域から診る」

新島新一（順天堂大学・大学院医学研究科名誉教授）

【子どもの発達と新生児医療】

新生児（特に早期産児）の脳は脆弱で、その時期の低血圧、低酸素、高酸素などが脳室周囲白質軟化症など障害を引き起こし、その後の脳性麻痺や発達障害に繋がる。近年の新生児医療は救命から intact survival へと進化し、brain cooling や Stem cell 治療へと変貌しつつある。

【子どもの発達と内分泌】

胎児が妊娠中に長期間にわたり甲状腺ホルモン値の低い状態に曝されると、神経および行動発達の遅延などの不可逆的な脳障害が生じる。WHO では妊娠中および授乳中の女性に対して、甲状腺機能と胎児の発育を保持するように勧告している。小児期の成長ホルモン（GH）分泌は出生後 1 年間と第二次性徴期（女児 11 歳、男児 13 歳）に分泌が盛んになる。その時期には睡眠が深くなり身長が伸びる。GH 分泌不全の子供達は、睡眠も浅く、熟睡できないために、低身長・肥満・鬱症状となる事が明らかとなってきた。従って GH 投与は、低身長の改善だけでなく、肥満、睡眠深度、鬱状態の改善が認められる。

思春期の初来は GABA 濃度が低下することにより起こる。GABA 濃度の低下は、思春期の子供がいろいろや異常行動、痙攣性疾患が思春期に増悪する事とも関連する。女性は estrogen の分泌が増える 12 歳過ぎに初潮を迎える。Estrogen は痙攣の閾値を低下させるため、生理直前（～生理中）は痙攣の増悪が時折認められる（catamenial exacerbation）。閉経の頃になると estrogen 作用の低下によりアルツハイマー病や認知機能障害の進展が加速する。小さい頃から estrogen 分泌が悪い Turner 症候群に骨端が閉鎖しない程度の極少量の estrogen を補充すると空間認知や計算能力等が改善する。

【子どもの発達と微量元素】

鉄の次に多い亜鉛は 300 以上の生体内の酵素に関係し、その欠乏により成長障害、味覚障害、臭覚障害、貧血、創傷治癒の遅延、易感染性、皮膚炎・脱毛などを引き起こす。血清亜鉛値を評価することは、発達期の子供にとって重要なマーカーとなる。

【子どもの発達と消化器】

近年、腸内細菌叢が精神状態に大きな影響を及ぼしていることが明らかになりつつある。カナダでの研究では無菌のネズミの腸に他のマウスの腸から取った微生物を植え付けると、ドナーの性格まで受け継ぐことが実証された。人の不安や鬱病、自閉症の治療に腸内細菌が応用される日も、もうすぐかもしれない。

【子どもの発達とアレルギー】

現在、スギ花粉症を含むアレルギー性鼻炎は国民の 40%以上が罹患していると考えられ、今後も増加することが予想される。予防や治療として使用される抗ヒスタミン剤・抗アレルギー剤にはヒスタミン受容体の占拠率が高く、小児に対して眠気を引き起こし成績が下がる薬もある。発達期の小児には脳に移行しづらい安全な薬の選択が望まれる。